

マレビトとして松岡正剛氏をお迎えする

私が育ったこの地には縄文から近代まで、すべての時代にわたり意味深いモノゴトがありました。多くの「日本化した仏教」を生み出した延暦寺があり、琵琶湖は「近江の湖は海ならず天台薬師の池ぞかし」と語り継がれてきました。今でも、日々の生活の中で守られている祈りの文化も奇跡的に各地に点在して残っています。株主資本主義、グローバルスタンダード、コンプライアンスという平板化のもとで、日本の立ち位置が見えにくくなってきている時代の中、「松岡さんの編集的方法でこの近江のモノゴトから日本のおおもとを見つめなおし、日本へ、世界へ発信したい」と思い続けてきました。

琵琶湖疎水のそばには、延暦寺の「別」である三井寺（園城寺）が隆々と存在しています。あるとき、福家俊彦長吏（当時は執事長）を松岡さんに紹介させていただく機会に恵まれました。すぐさま「三井寺の、いや福家さんの中に、日本が大切にしなければならぬすべてのものがある」と松岡さんは感じられました。ここからプロジェクトは始まりました。

近江にとってマレビトとしての松岡さんをお迎えするために、まず地元の人々にお声かけしました。パンデミックの中、仕立人の和泉さん（百間代表）とともに一年間をかけてリアルとオンラインを駆使し、何度も松岡さんとの交わり合いを軸にしながら、著書の『日本文化の核心』などを共読、「ジャパン・フィーター」を用いて大津や近江の鍵で日本を解いてきました。

さらには、ゲストの方をお迎えし「松岡数寄による本気の遊び」も始めています。「設えをするための段取り」があるのですが、そこに「日本のおおもと」があることに気づきました。みなさまにそのことを感じていただける場づくりをしてまいります。

松岡さんは、お父さまの故郷でもある近江を「日本の奥座敷である」とも語られています。このトポスで日本の「後ろ戸」を開け、モノゴトがもつ本来の価値を紐解き、想像していくことで文化経済圏を構築し、「近江から日本が変わる」ことを目指します。その「言挙げ」の場にお越しくださること、松岡さん、近江同志一同ともども心待ちにしております。

近江ARS事務局長 中山雅文